文[illegible]

四

内閣文庫
番號 和 27342
冊數 60 (4)
函號 202 351

内閣文庫
和書
類 二七三四二 號
六〇 冊
三〇二 函 二三 架

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

源氏十六歳 六条の御息所 源氏 内裡

六条わたりの御しのびありきのころうちよりまかで給
なかやどりに大弐のめのといたくわづらひて尼に
成にけるとぶらはんとて五条なる家たづねておはし
御車いるべき門はさしたりければ人して惟光めし
させてまたせ給けるほどむつかしげなるおほちの
さまを見わたし給へるにこの家のかたはらにひが
垣といふ物あたらしうして上ははじとみ（半蔀）四五間
ばかりあげわたしてすだれなどもいとしろう
すゞしげなるにをかしきひたひつきのすきかげあま
た見えてのぞくたちさまよふらんしもつかた思ひ
やるにあながちにたけたかき心ちぞする いかなる

明治十二年

物のつゐでに人かあらんとうかゞひておはしけれは車を
いるへき門はさしたりけれは惟光をめさせてまたせ給ふほど
志らんとうちとを門てまつほとのちまた門へまいりか
どいしとこのやうなるおはしかれかのかと
なくものはかなきすまひを哀にいつこかさしてとおも
ほしなせば玉のうてなもおなし事なり　きりか
けたつ物にいと青やかなるかつらの心ちよげにはひ
かゝれるに白き花そおのれひとりゑみのまゆひら
けたるをちかた人に物まうすとひとりごち給ふを御
ずいじんついゐてかの白くさけるをなん夕かほと申
侍る花の名は人めきてかうあやしきかきねにな
んさき侍りけると申　けにいとこいへかちにむつかし
げなるわたりのこのもかのもあやしくうちよろぼひて
むねむねしからぬ軒のつまなどにはひまつはれたるを
くちおしの花の契りや一ふさおりてまいれとの
給へばこのおしあけたる門に入ておる　さすかに
されたるやり戸口に黄なるすゝしのひとへはかま
なかくきなしたるわらはのをかしけなるいてきて
うちまねく白きあふきのいたうこかしたるをこれにを
きてまいらせよえたもなさけなけなめる花をと
とてとらせたれは門あけて惟光の朝臣いてゝ
きたるしてたてまつらす　かきをきまどはし

侍ていとふびんなるわざなりやそのゝおやゝみた
まへまくべき人々も侍らぬまゝにいかゞはしき
ありさまにてたちはなれまいらせてこゝろもとなき
いれておはりける姫君えがたくおふのあざりのむすめのみこえれ
かくもしすみけるほどにつゞりひきちかくよろしくおはし（源）
ましかはよろこびひと又ふかき事もやうこれまで尼君（大貮乳母）
うれしきおぼりて乳母（乳母詞）げにうれしけれどもすこしかゞく
思ふ姫君の事は年ごとにまいらせて侍なれば願せざらく
おとゞのうちえの侍らんさきとはおもいかけこの姫君へ
ゆきひとつどいもてきこしめすにまいりてすし
かくおもひけるまにも見るにつけ侍従はいかにまかせん給
みざ佛の御ひかりそへんときこえさせ給ひてのち
えそよろこびおはしまして月ごろ（源詞）おもひてすぐしかせていく
とやしとうしびなげきけるつゝましくてせけん
ましにおもし姫君ていと夜よにおもひすん命なからくて
あはれ母君もくすこそ見ゝし姫君さそこそさての
おぼつかなく（北のイ）みそゝきこえりなくせられ姫君の一の在ますし
根おぼつかなきわざとすんなくすて涙ぐみその姫君
北の方すくとぶらひあれとおぼして思ふべき人はおさ涙
しうまかりよみすけしのをまして・いとおぼしそでしう
きゞさひつまつりあん乃至いつしくかくしけ
なくおもしのめんかれば、すゞろに涙ぐみなりけども

いと見ぐるしうこそひてうむきめる世のさりがくなりて
まどろうひそこれらんぜられ給ふつきじろひわく
えし君ハいと哀とおもわしていそけなりけり程よ
思ふべき人のうちすてゝ給ふ給よりろみごりなく
らむ人あまたあるをうしかど思うしくこそひむ
つぶろすぢ文なくうんおもかくし人をうりて侍
かりごり申さバ給夕まよしもえみなきどまうれ
まうよとふひまうづ事いなされど殺しうた
いめんをあ時ハんばそくおかめうと成らめまうれまな
くさうがすとおんなすどこまうようひ御てそ
のごとひ御へ秘のよかひそいと云せきまでうかり
みちろまよげよ世までこへいまうすへうる人の見んと
きそぞうしと君をとりどうしとみつ子ごされ
おもしかゝれがりいとにすずみてはじむべき事なれど
とぞこの御えをそいて御とそこれらうまし
をかしておりつゝわかきれらんすれどりそあう
しうろうつり音いとしいとつまうすひるうて
おうしようすさひうさうり
ひあそまよそれらとぞみろ云うさいのひかろへう
夕がほの花ろこえうとなくうきまどろうけめる
あそえうよゆへつきうれぞいと思のおろうよ程しう
おぼし給ふ惟光よ二のまうなかるハかのよ人のこと
云ふ

むつとひせうありやとの給へ共、まいめのとこれみつ
んとハ思へども、さしあたりてこの大事にてよ給ひ
まど病者の事なれバとひ給ひあつかひ給ふかとよ
となりの事いまきゝ給ひぬれども、たゞならずげよ
竹ゆまバ、よくしとこそおもひさふらへども、この
程のさいはい、この人々ありてかんゆうとちがひこのあね
んさまにて御殿をして三人との給へども三人でこの宿り
すつおのこをとよびてとひ給へバ、そのすけすけの
旅人の御宿はよせん給まへ、男ハ井中よりまいりて女
まんまろく事にれこそいろいろまで文つかひ人して
きうよふともしらせきつき事かなき人のえだかま

給ひぬまやあはれと竹つかはしてその文つかひ人なり
きこえりかゝる御わかれていかなるとおぼさまししかるべきき
こしやあはれとおぼせども、竹つかはれん
みかくはずぐしきぞまいの代とよいおもひう
ぬれんあはれかしれはあらうかこにいそうあはれさ
まにゝきこう人給て
よりてこそられけるとそみちたなるれよあのぐ見
つる花の夕がほまつられども、ぞんでつるにまこ
ぬれさまなりけれども、いとあつくおもひあそられ給ゐる
れうぞめいはれ見えとぐさでけれども、しけるを
いつへ給ひて御文まいりかならずよおくやさ

とありければ、おまへにいとはゞかりおほくてさぶらひし
ちゝへのあれど、かざましとさひて、とも見ん八年のな
れさきの松かのゆるそしと思ひて給ふ、いとさい
たちてそりひまぐよりみゆる火の光、蛍よりけげに
かのよ気なりけれ、かへしの前よりいまさらお哉など、
なべてのところよ似ども、いとのどかなるよそしとみゆる
し給へりけりときめけれ、ありさまなどのめしきさまと
なりよりおありつゝさるおかしも出らるゝぞあはれ
よしたとあてすゝしねすゞし給て月やいかゞ
おとまいで絵かげのけすゞしげよ人のあて
給ひんきぬしとぞりあるけさまよありなりけりさふらふ

ふしぬとところのもあはりし給ふさきしきにまさる給へん
たてりけれど、かゝはかなき一ふしまれんとにまり
ていかなる人なりすこきかんといふ、ゆきていれかとま
まいりこれこそ月ごろありてまいれるまつらへ
へる人なかよさげよ御随身びこうくかん給ひありつひて
まんなど給ひてちくまいりよりて給ふ御随身
なまんとなりの事ありて給ふとの、よびてこれ
を給ふしうどいふべし、そこに給ふぞいとものびて
さ前のこゝろありびよりありんならんあるべかれとぞ
のへといふによ家のうちまれ人ならにありきざれとなん
申と私く中ごろのふかいまみし給ふはなまよほん毋

どものすきかげみて給ふ．さびしさ物かおとどり
ひきうけて．うしろく人待まめりきのふ名月の影お
なくれいそて給ひよ文つくとそかそ給ふ人のかり
こそいとよく給ふが物見へかけとひしておる人ぞこそ．
あひてうちなくさまぞとおんしるしみて給ふと
給ひ．源うら立行て．しうやとたもかりうたり．
わか君のうるへきれけのかとすれど．はつえひの殖人
のむびきめで給ふしうりさ海など思ふよいすきさ給
そげんも情なくうつしめつべし．人のうけ
ひかる源氏そはだに住すりぬべき事あつれ事て．
このまうしうねばゆりの物をとらひとりみ給ひ人
かる事りや給ひどばかりさきつぶてつくいてせうろこ
まどつろうしありて給ひきすれありてしそらとくも
事なとらし給ひき．いとにおもしうかおかぬゆうるへとも
すん給ありと給う物見ぞば．る給ひいひよれ．さび給ひて
いかうしりうすんとの行ふかれ志もかしりと人の
こひたやしとまみすれどそのたのうよきをのま
らうたりかぬをとこうけて人行とあつくしうおもほど
ありきうさそのうつせこれあさまし．うつまさなれば．
山里の人よかさぶひておぼしよおぼいらうまうりぞ．
いづらしさおやまちすてこそやさめつべきことひとね
まをそてやこすんをとさらうよめうらぬおりのうかうり

のかみしまでいおもかしうらさりけるとおりしわ
まま母乃志れ侍れどあれは、いふかしくおもひかしあり
志れば、のおもはいとくくますくなりぬるげんなあり
し、うらみなくまちあつかひあるかさつらきの人ど
あはれとおぼさぬあしきをあらねど、つまなくて
きくかくらん車乃きたりけれは、まゐりこちこの人見
たてまとおほと頼むは、いよいよれすけのかりぬをずいそ
ぎまゐれは、なるかの、いかにとて、すこしくろき
やつれなるかふびとくさいひとふつりよんつきさし
さまとと人をいやしうぬすちよかさちすどね
びられとききよげみて、あるあるしくにきようしつ
きてなどとそおりめかくすの飛鳥なとひにけ
たていくつとこんまうしくわぼせど、おいたくまで
ゆくて流人のうちよおかしいつのとをさまくなりぬ
まめやかなるにとす物うく思ふをおもふたこがまし
うう、しろきさ絹さざなりやげよこれそおれちう
ぬかにそもすへりけりとむしまのうこのいさあおかしい
てこいとそ、しきよつまなきんいねさくれど人のたち
いあされとれがしすりかむすあとてしのかきんよ
あびあてかのさとむかそてりあへしとき紛よ
一うさうくけんあさてしくて今てさひいえすまず
き事ますやとこ君をとうくひ紛へど人のんてとあんを

たゞん事まてゞまからひのえゝしうをまきれ給ま
じきうぢまゝしてまをなきれたおとしまゑそでいまゑまえ
ぐうしかうへしとこひえうれさんぐまたうてた
こゑかしもすれるゝ事そいとゆふうひたまぐうり
べき事まをひそさうべきこおりくのけいてへすごたまり
うしくやうとつ。をすげの第づりひよつきゝうてとれ業
あそしうやうたげよめとまうべきあしくうへなど
してあされとそたかしめへ玩人のけそとひすれハゞつ
まなくねさき物のさかりきよおぼと。今ひとうさおし
つまくあうとこそかたくじおとをめべくみとしさま

なりくとたのこそとりく給へど。れねえかうをくだうる
けんが秋よかそあうりめへへやり方へくしんづうしした
かしふぐうり事そとおりて大かよい給ひへきつゝ
うちわしゆ中の三四竹ラく約へう六条かうのうそごきを
ぞくいうりしけりしさゝとおそむしを竹こ約てはいひき
ありなのあるうれハいとをしうしされどよそなのりし
けんまをひのゑうまもかゝらなうの事ハかなきもいかゝ
ことはうりそゑそう。女のいとおそあまりまるゝ
まぞおかしこをめく消れんぞまうまてけしてひのやとも
よまだなく今れりのきうんよいとぐかくつきれよかれあね
ざめでおかしさかうて事いとさまぐなりきりのいと
かうきあるさいくえうのうされ給てけつてげ給う
うしきよからうけさ従いて給ふいと中ねのを

りとみえしひとまあけてみなまゐりつどひた
まへとおぼしくれ几帳ひきやりされはれしもさと
てみいれし中将せんざいの花くみだれうたれさ
ぐそよ春すゑひ中将うちまさげよさくひらしうれ
かへておくすゑよ中将れ君ぞれともよ気のかたん
いろのおりよおもひおもしとりのくさをおきやうよひき
ゆひさかえつきたれどやうよなまあきてかへ見入り
見中将ひてずこのまゆりらんよ志づしひきす入中将
見給とこそめしぬりてなしうこのさうりだあさま
しくりと見給ふ
さくら花ようつりて名はつるあだなきにおしてすらへ
さ今秋のあさがほいろずすべきとそそのかして中将
むびとすれてとも
中将きりのそれはまこともなくきいつそ花よんぞとる
ぬとぞてみるとおぼゆやげてとよぞやうなるにれうしぞ
なるさまひともてなのこのまうちもとゆうちきて給
ゆしぬきのすそ露おげよ花のなかつよきまじかなそ
あさうがおりてまいりれどなど中将ようくまいりしげ
なりそれかよううち見なすかへぶらし見しらなる
すし秋のなかけきしぬ山がつも花のうけよて秋
やもとうはまかしきよや此れひかりとみすかあてり
たかどくよつけてげかなしと思ふもしとあと

つかうまつるせんやとねがひければちかひかう
ばんと思ふおりふしとおどろく人はいやしきまで
も都は一のにわつかりまきつてかせんとぶようちはい
なかりけりまして申すべきつゐでの氏との業ぞ
まりかしきにれしきにみさそまつる人のするしかれ
んおびひしろハいろくびをとろつまぶひ給うらん成言うち
とむでしうそぶきをぬきとんりとなきそすまぶよごへず
ありますとやられ惟光がまびりのそひまみえいとよく
あるいみとりて申すとそれ人とおほつまえおかし
給うじとへよいみなくうれしのぶかうし紀よあすん
給ぐとつまでなろまでよこれ見の門にしときわかなう
やまねりきつて車の音すれバとろ紀ねどきをのうき
まどすへのあるまじふしうとねがしきこえてひけとろ
ときにぞべものかずそうちまんかのうられどいとやうそげよ
給日とひさきことひてまゐる車の給ひとおぼえさて。
もろ人のいろ紀ざてたぎの君こそまゐる御こ紀中
おぼえこそこれよりまゐる給めまゐらこいへでまゐる
紀おとなしまゐりておなかまとでうく御かたいりぞさ
てしろうぞいでみんとてそひてかうりしがりね
とをまそてちんかまひ給いそぎうおハきめのすそ
と御まひきうけてよろうひさきてりしよりを
おちめんべそれハいでこのかうつるきれ給こそさうし

うしをきこえれとおもひりて猶のぞ紙のへんとさ
めゆめゆ君はれすとしもかやみてかんすいまんぞて
こそありしなまふかしくれいしとうき人は中将のど
いまんられど猶りまうてをすん志うしにいひ給
しすど佐つかれど。きこしにも車をかへましとの
所ひてりしられ気よ志ざりし人まやとおもどろし
ようをいとまうらしきぞすられにしき紙みてまゐ
らのけさうをいとよくしらきておかいとのこころ
所なく見ん所人をきかずとぞてぬれどちと志もそて。
りのすどいふまじきおりとの給ひと見ておぼおほして
まんもうられまうりありくいとよくかうしなかとと
思ひそてちいさ紙子ぞこもすずの給ふが事あやまちは志
つべきをいひまゐらして文人かきさまをしい
てつらり給すど脱ありてまいらぬ。左君のとつてひよ
このせんのひでよういまのをとさせよとの給ひそう
まみてこもやともろもてまねのかど候見てふよこれ
こそられ人の所でもあるびかし。志ものしれすらる。
そのなかに思のほかよかれし事こともあるかなど。
おもほしてなりしり惟光いかくられ車をけれんような
はしと思ふよぞの道もくまなかなしときこんすそでみ
じをたびやまどひありきつ。志のびておりし
まぜるそでぞり北山鶴のことざくしけれども

めのとして母をよりてその人をさがしいで給へ
と我もあはれとおもひ給ひていとよりなまめかしつま
給ひつゝまいらせし時あらはれき給ふところは
ばだかの桃女をつかへしとみまつらば惟光がはからひとぞきこえけり
はとをもよりてをあはりくげゆう人のいとほしさ
きこえしもとくとかんつけられて給らんとき、かく
そまうすべきよし桃をしまつれども人よしらせ給ふはぬるまで
よそれみづからのちゝ人をしずいまんやうりさてい
うらむゞけよきうましきまいらひともいつりぞ
かでおりしあそばしゑひやうかゝしきりゆとそでご
まりよするゝどうりなめよし給えば母はいとおや
しやうんにぬんちのこしてばつひよ人をとむ暁の后
をさうくとをばわりうこせんとさつねまことゝころ
とろくまでりしつてさんがよおそれなるこそいふおろ
まじくこれ人のはんよゆうされば、ひんかくうく
しき事じをおもみし天下まびついとしばく
おもしまみがうすらかまぶ人のみづろくおもひそ
あるとゝいとめやもく玉のう給て人のとがうゆ
べきこうまひはし給はさのつくとおもしきまで
けさのかどにつまれへぞそもおがつかずくなりどひ
まづうえれ給へばりいと物らとしくさまで
んとぶむべきものさまよこそあらしにとぞいみじく

こひさましけるかばよ人々のけいひいとおさまらしくや
いつらよれかどきて和かくれもきこえいとされて
なさつるよわらびなうねつる世をとまごゝろえぬまて
おもひいでやんおもとなりたよいあつまじいかなるよ
いとうえしそもしとまうらんぞでとおもくおぼしといとし
ゆうらちさてたこぞくとこそ急つまへゆうらのの
ぞとなりさまをと人々かともその見んを給ひ侍
かうさ給よ人々としづかて出入給て志給へび
うしおもなん和の御んそゑめきてしうて思な
けうられども人々の御けそひそくてさぐりよそよう
れわざなかも冬れバたまかりようしおもん給
ひすれそのくしいてゆかやさるめりと夜いを
そよろぬさままいたなましおもれすのしけ
あら事よりとんゆかまてあるこさあそへしらう
うびひろきのおりひとなんしりら若きくら
なくさめてそひらくまうすべいつきといりとうれ
こさが給んかりそあれかられどそさみなかれど
ろまよそそらいろひゆかん月くといとそ志くしと
おぼしとよ思ひまどうてなれちよさひまししゆへ
くれそがかりのとさひそてそすぎめ入給事と。
ゆうよさでるしてんとおかさまたびん人々御れにば
しだへてそとき給よるくまでいりとあひかゝく

こひさまし給ふばん人のけいひいとあさましくや
いつはれるときて我かくれもきこえいとくれて。
たよりよわびひよりわつ世をまづ志つぬまで
わびいとやんごとなきよいあまじいづくよ
いと口惜しくもしまいらんずとおもくおぼしいとまして
かくちきてはうずくとこそ参つまいよろつのには
ぞことありさまをく人々とゝもろの兵を待たん家
かうさ様よ人とつくしつかて出入ずで志待べし
うしわきおん我の思ん今思わきてもうくて思す
[illegible]

このほとこそのくまくて[illegible]
うらびんるづくをめてつまなく志うじがかそうけて
恐ようぬさままいたゑまじわざれわのけていう
あら事よりとん給がまさく女々こそおやしき
うづひかくの折ひをあきんしりる若をりくら
なくをゑありてそひくくまゐずいづきといりとられ
こそかつ様んかりそあれかくれとまさみなきれども
ゑよこそうひろひゆん日くどいひとを志して
おぼしとよ恐ひまどひてなれやよ恐ひまし候べ
くれぞくかづりのときひまてそすきめべき事を。
ゆうよさでるしてんとおがさまび人々御ためは
しででへぞそときは給よるくるまどいひて出ひがく。

ならし給までおもかし歌人ハ程されとなくて。二条の
流れまでうたてんりし給ふおりてびんなるべき
あとありともさうべきにてそハがんあつうはとく
人よ志むしといふきハ。いつなるあぎりよつえわ
まうんすどおもかしよう。ざいとんやときこと
こゝまでのどころに給うんすどうてつひ歌人でお
代わやしううくの歌人ど。よつろぬれりてなしな
生え。猶わそてろしくこそわきとゞいとすちびて
いへど。けよとかくゝをまれ歌ひて。あさよいつまり
きうて。きうん。たゞそろられ歌人うしとすいし
げよの歌人ハ。女こそ。いみじうちびきて。さうもわり
ぬへ。そことひくり。よにはなくかくこまかる事ちりと
見給ふよ。程ゆ本ねのとこ夜うしかしくゝこ
まし。ふぶ海まりこひいでられ歌人と。志のつろや
こそいともおかうらよそとひいぞ路ろひろしき
ばこそ。みとろむしきうゝらべきんさまますどいなられ
いかれじくよど母こをりんおりこそいさやうよ思
かりろ事をわゝらん。みかうこそとさしうろろ。ふ
事あらんこそ。哀なろへど。れとは人わばしりる。月
十五夜くまなき月影。ひまおかろういたやのこまな
くびりこそかんすつひ歌をぬしとま井のさまを
めづらしきよ。暁ちろく跡よりるなろべしどあり

なかし秋まておもかし給へは花されとかくて二条の
院へまゐりてんりし給ふおりてひんなかるへき
おとなりとこもさふらふへきにこそはかんなかりけ
人よ志むことのあるさはいかなるもきゝおよひ
まゐらんすとおもかしよう いさいとんやとき
こゝろまそのとゝにゆうんすとうてひ給へても
ゆわやしうくの給へとよつかぬれりてなし
まて花おそろしくこそあまとゝいとゝもらひて
いへとけよとりのまれ給ひて事よいやまり
めへさこんくとしたなしからぬさま

きてひらあるよ志らぬかんえしとおもふれかなかるへ
見給ふよ花のおもかけののとこ夜うらとかしくゝ
おもしんさ海まけるひいでられ給へと志のすつる
こそやとおもかしよそとひとそ猿らひし
はこそうたとうむしきう かるへきんさまますといなれ
いかれくよとあらくをりんおりこそいさらよ思
かゝる事こそあるゝんなかうこそとあしうるう
事あらんこそ哀なる人たれとわへわひしく給
十五夜くまなき月見しひまおかゝるいたやのこなた
くもゐこそかんすうひ給ひぬしとまみのさまを
めつらしき事よ暁ちろく秋よなからへしとそ

の家にはおやしき志げのおもてにしくはさましまして、
気いとさむしやうしこそなり農ひとひもこのむ事と
くなくお中のかよひもならけねばいとんばそれが
夜ごろきて給ふやすきいひつくしとを皆すゞいと気うつ
そのが志てのいとうきにたき出てたくめ給ふさへぐこそ
猶うさ給母いとそゞろしくなりえんなるわけしきぞ
まんべ人はきくをいりぬべきことゝま井のさまなかり
しかされどものどかにつゞきさをう給しくもはべりさ
事を思ひ入りさまざまなるにむかりそすしを
さまいとおそろしくおこちらしくて、又なくおかしが
りしきことなりのやうにいさゝかいうすな事とを給
しやうりさ海でもねでおろくくおぼめくやんなり
おどろくしやうてこゝろうはうさしと乃ことゝそ
枕がことおおがそおもれみてうし夜しとこれはおぞおぼ
かさなよのひびきとを皆はれ給ふをびいとおそろしう
めざましきをとちひとのこと皆猶ぞくしきよの
とおかりあろ人の家からきめてのをとゝもはよ
こまごまときこゆされいそとぶかりのおとよりあゆ
て志のびゞ給事おかゝりがちに給おすくじ聞えすり
それをわりどもひきわけ給てりなとゞそれよかんはし
給ふかとかす給遊よそれあるそれ給せんざいの
露は枕かるところも不なし事どきこゆめきる

の家〻おやしき志げのあれすゑしゝかさまして、
気いとさむし、やうしこそなりそひのおもてのむ前と
くなしく宮中のかよひも忘うけねば、ひとんばそなれば
夜ごろきて紙ふやすでいひつくとさ竹すゐ、いと気高う
そのかしこのひとりにたきま出てなくめぐさえぐこそ
租方き強母いとあづましくかりえんふあけしきぞ
まん人はきくきいりぬべきこともま井のさまなかやり
うしされどのどかよづつきさとうれしうはかりてさ
事と思ひ入るさまあるでむかりそすしも
さまいとおそろよこひかしくて文なくらうが

いつとゆかされてぞみつくかゞごかぐくこあつりこよりぞ、
おどろくしきつきこゝろうにかゞしとてもとゝこそ
抱かことおかすあれみてうしあしとこれかのぞおおかけ
なさなよのひゞきときやかれ紙をはいとわゐしう
めざましきことすひとのことやう猿さぐしきこまとの
こおかりあろ人の衣うつさせるのもとゝもたはうよ
こゝうのさきつわゝされそとふかりのすゑとりあわあ
て志のひゞる紀事おかうりかうちゝ紀おすうし前すり
かれをやりどはひきわけ紙てりうとゝもよ見にてし
紙ふかにとなす紀逢よかされあらかれ紙せんざいの
露は秋かうとところもたるし、事どきつゝめきる

まゝ子の事思ひみだれかなしく、ゑいぐへの中にゐきまいらせ
とたよりまどひけるをりふしひ大師へうれしみておはし
まして、あるべきやうなきみぎりとなりてさまよへ人をたて
ければ、そればかりひとへに御はうしゆのよはよろこびけれ
つゝゆくさきもなくありける時に、わたしもうしとる女のなけ
よろしかるべきとのゆめにてそれぐるしぬしとぞくいとけ
さけよ、おへかするがうしてむこととうりさてゝすぐ
れあるてとぞおそれどほそやかよろしくごうして、
ねうらひとひあるけそひ、わきまへぐるしとかいでと
いそくかん、御ゝんでみをかぎとすてしろへ〳〵で
大師ひおぎくまはからとけて御まゐらしくた
はかりれどいざるめでこれをきちかきをおかみへとく
ゆでゝ源おんとひとおいてよいひてたまはせ
のこちがぬ竪のまでゝたのみ大師かよらぬとろ
ぬ人おでおかしくへかえりてよろれ人おとぞお
がしねで人の心もんとこゝろをえまいらせ大師をぞ
たをとかしいでとひおんとぬさせ大師で筆引
いれさせ大師これあるへくもかゝげ御かしのとろ
すぬ年と月でおほかしなづ〳〵たのこをとけ
此うくらの時かうもちうなりよろとりの事
をむしてみてもちしかおかんてたきあびら
あまよめくるぞ此かたちかのけえひきへさ

思ひのまゝにみかたらいしかるへの中にきりか
しとたによまとひよ仏ちりひ給へられみやまけ
おそれあるまうよりきみにかさとなりてさまう人
がりてそれんがしひとりにぬかりしぬよよろつけ
つとゆりさりてきりしおきくわたしきつしと人の
よしなかりとかりよてそれへりあしぬしとりいとと
さけよあへりすりく候してかりことこうりすてすく
れ香りてとぞなされどもほそやりよなくこして
ねうらひひるあけそひおもんぐるしとあいと
[illegible]
[illegible]

てあるさんうくてのこそひとく好みかりりとの給へ
なりて小宰相ありんといとおいてうりよいひてかてさ代せ
のこちうしぬ様りなすでまでたのち給ふようらとら
んぞらへさでおわしくうがそりてよう人れなう人へとぞお
おしねど人の心ちんところをえぞうり給そぞ
たまとよしいでくとひきんとめさせ給て御車引
いれさせ給これおすり人ぐをかうけ御のとうり
すきぬとと述でおほかうしなずうたのこととけ
候ぐうり晴がらそちりなりよりとりのす忍
すど候ひて金峯山みてまとしかわれんでたきあびら
あまよめりづてぞ候ゆったちかのけえひまさ

けにことはりかはと哀よおもひしみなくてよみにけり世
にたくひなきむかしのあめのいのちよりよろこひて御かとは
なりそひたてしもいさかひしよそおもひしむかしの御かと人
は世とのこゝろおもひかけりとかくなけり御ひ
て
かくてひさしくかたらひたまふにたのしみきはまりてよる世の
れ長生殿のうちにてかみのちかひをなし
てかのとしもとさんとひさきうへてみちのせいを
御ふかくきこえのれたるあひとあらし
さきの世のちきり忘すれんのみさよゆくと
なつかしけれは月よゆくなりしかれをみてもあはれにそ
女はこゝにかくすいへとよをゆめとしれとともにいは
れてかさりくさとおほしけるにつけつゝも
ぬきしれおとろいのいろき出御てかならす
とみかとはたをそのかはりつゝちきりなる
ぞの御心おもひかけてかならずもあひつつ
猶おほとし門の前のうつくしくおとめの
とらたとしへなくこそちきりそこくならは
よそれといへかならす御袖をかへさむや
そのまつはなの事にてすゝめいたりなんと
なるさとよみもありけるとれ

いかに人もろ〳〵やかん人のまどひあん我まぐしぬ
志のゝあれたるひ行くりやとの路をいでちがひて
山のはれんを三しでゆく月かりこのやまでて新
やみあらかん心はそくとて、このおそろしうまでば
里なれどかれ行くつど〳〵ひろしとま井の〳〵ひをひとて
松しをおぼしとれ車入させて雨のあいにたまな
どようふかどからん心車ひきうけてたち行人
思をえんすうんちして、きのさことすどを。
人しれどこひいでなりおつりいみじくけいあらし
ありくたしきよ二のれ志根志りえそてぬばのぐと
抱見ゆう猶よあり行ぬありかりそあすれどきよげ
よ志つらひ多のれもよ人もさうつはずりたのぶびん
かうもさうれとそむやまし現しをおいしせて九
およつうまつう抱すりたれば美りよりて行うき
人めすべきまやるどもさしとれどおと行くよ人ま
しきうれかりとめたれありゆくよんよりおりよ
りうしとすとさらかくめさき行れゆ白すどいそれま
いうをそれどこらづれまうすひらあそびさまざ
ぬ事あらへ御いなびねよ秋きなうけど葉りかねぞよ
思ありの事なし目たら猶よ秋き行てかうして
づうしおまど行ふいとやくあまでて人をもなくなり
ぐとかんたされてまだらいとうしとまうし物

かりそめながらきまするなどいまでとまりみどころなく。
これ秋の野ら出ていにしへみくさにうかれかれども、
いとけなきおさな成よりも前かれ御心のそのよ
ぞござりしみどしてもうかれども、まいりつかふまつり
うけ給はりとくそもすりよおぼろけれ、さりましとこそ
よるども我をとぞみゆるしてんとの孫がおかはぬ
かくし給ふまど母のひとつくしと思ふ事は、けるよ
かなりまで満わらん事のさ寂むとひい
さとおぼして
夕霧ましくよ死なでこのたよりよみて
えよこそかれしれ、源氏のひかりやいつよしの行へ、が、

ありめよろんとこそとて
ありとみてゆふがおのきえつゆはたそかれ時
の空めたりにほのかにほのよほのかにおもふ
は事ようらとを給ふかさまよりかくところうら
まいて拾まてみて孫のうきさび書て
孫つくさよおくえうとよひつのねとどまで
まなのりし孫人ひとむつくしとの給ふどおまの
こすれどぞかようともなさまいとおひぶ
まへりよしこれなるものおかまと根のつから
らひくし孫将ちようつかれざ拗みぶ共
は右近かいそん事さすがにひとをもくれだちく

こゝ悪てさまつるひよしひくまでたどりありき給も
たゞしう。さそもありぬべき申さ候よこそいとそし
もろめよそ。もろいとよく見ひよりめぐりしさひと
此ゆづり侍りてぜんひろさよおすゞめぐましう此ひ
をうだとへなくしづかなる夕のそらをとちづめ給
ておくろきいろ梅枝もろうしと女かおりひれ
ばはつのまづれとあそびてまうひつ給つゆそで
へとみちもしせ女もうろありさまゝと見ひのかろ
よおるしきんちそしをづし。まどひのつばさま
すれてもこうらとをゆくろきいとらそし。
ほどゆきらつまろひ言して。そのといとおもう

ろしと思ひらさ候もろうしんろうしげうしとくおもう
給ておかとれ見ぶつ弟をそ。あごうなく城ようり
ほきさ候まで。あかんのうちれへぶそのう給へる見ん
つうさと根給ふかよいろよりとめさを給らむ
といづくよ手ぶねかんとおぼしうりてうてあやし
のんや。六条もとつりよそいうよ見ひこぞれたまうん。
うしめんらまんもいらうさてもりまりといをと
しきさすがいまづ思ひて給。なまんをとなきさし
むろひとおえれと相ぶひまよ。おまりの心つく。
みうんへもろうしきれはさまてど。すろしとうまそいや
とおもひうべられ給ふなうまひすべきれどうよ。

すこし様かはりし歌人によ発句だにもよくておもはしせなる
女かそ。とのがれておもしと見えすなるとぞ歌よ共
りわきでかくさむとするさとるさき人歌かておもし
て。ときわりし歌ふこそいとわざまじくつれれ
とて。このあけれるいつの人をとり紀をとこさんとすると見
歌かおりのよとをそつうんらしてかどるつさ歌合
ば。火もきくくま久かうさておおがけりもばたらとひ
きめやきてくちとさ歌て花をとたつ歌これ
えもおそろしと見ひらさ海まて筆りもかきて
為なるこの丹人だ本こして志とそけてまいれと
いへとの歌合で。いそでまつれんくすてとみ合で。お
肌もろくしとうちもこひ歌で。あとさくき

つけでまいらぬよ式山女志いみじくもあくききまでひそび
さまにせんと思ひ。おきをも志てよなりて我かれ
ゆし紀なかさ。抱おぢらとすんまりなくとさせ歌やかれ
身ていろよおぼちくようと左をも咲なへ。ひとりよてて
昼をろしとのこ見つつ抱をいとそしとおがして我
人をたこさんてそけて山びのこてるいとうれ。
もてよ志けしちくりとて左を訟引よも歌てすの
つまでよいでく戸をとおしあけ歌合ばかりごのひも
きえは冬風すてしうわかなるなり人ばすくなく
て。まつり娘のぞりのぞこれねて戸をこの流のおづかりれ

すこし深いり給へりよ。花かごとまいりておりしぜなる
女かそ。とのいりとめて御心しと見えすらゑとあゆれ共
りんそでかくましとするかたとするき人へ給ふかそおりし
て。とききやうし給ふこそいとめさましくつゝれ
とて。このけしきの人々とりにけをこさんとすと見
給ふかりのよそをそいろへんうして御どろき給へ生
ば。火もきゝくまゝのふこそておおかりのまゝばたらとひ
きこめきてうちとき給ひて衣をとたて給ひれ
そおそろしと見ひろさ御まして身りしも扇さと
夜なるこの井ぐ人ありして太そくゆてまいれと

給へ人ぐ山ひとのこそふちて思ひとうしとまし人々ハえきく
つけでまいるぬよ我女悲いみじくもあらききまどひそひろ
さまにせんと思へり。御をとき見くよなりて我かれ
ゆし給たまひ。我御あらとすんまりなくとさせ給ふ中主
御ていろよおぼけうくようと太をと中する。いとうよろくて
昼とろくとのこ見つゝ袖といとそしとおがして我
人とれこさんてうけて山ひとのこてうるいとうるや。
むつよ志けしちりくとて太を給ひ引よせ給ふておほしの
つまでよいでてしきを見しおけ給へ生バかこそのひも
きえはそり。風すこしうちふきれるに人々ハすくなく
て。まつ夜のぞりのにこれはて衣二の流のおつゝれ

子むかましやうひ紀ノ介ハよろこびたの事下人ハよう
ともはやぶさいのすいさんだうりなりあらあらせんじ
ににさん人へしておほせけれど志ぞくしてまいれどもよさん
もつたいなし絶どころもつくれにおかさよ人でも
まれな御前よふとけていかなるこ進退の器量の
まさりつらんそもここでせ紀ノ介でさつらひ申せど於
わを事ともなし おの月よりむら人よ業のさよりやり
てすまんまうで御ぬつまど申のうちにかねハさき
ぐらちかりけれバゆづかいとつきしくらちすうし
て火おやうしといふておかりかさきしのくて人いよ
あまりのうらみをおもひしのりて名だいめんハすまじ
らんたきぐちのとれかかりいまこそとしつかり給ハ
まごにうしふけぬよこころ尽くりいかそしさぐり紀ノ
人で母君ハさるあひだつて大事をハ助にてまよらの
かしくさりこごんたまぞおれねがるとしのりれあらう
やかまえるをいきつつのすどものりおく人をびやうさん
とそげおそろしら思いてすかなんまろあまへバさ
やうみねよいたどされしとてびきたてし紀ノ介ハいとど
うるてみぶりんられおやう御まぶらすべくて御
やおまへよこそまのなくおかかりつつめといへでざうよ
あどうちいまそでひきくり給よいきもをだびきうご
うし紀ノ介どおすよしくこうしてまされなよそおつぬさます

までいとはくもろびよう人〳〵まで、恥よけどもまめる
みありとぜんくさら源氏ちし紫式ろくりそまれ
はだときこえうべきさまよそあはれねぶちろ紀れ
光帖をひきよせて、すゝもてまゐれとの給はせい
あらぬ事みて、おまへひろくみえまつゝぬつまつさ
よみはしよみきえのがたりし、すゝりてこゝや、ところよ志
たびひてこそよ述めしよをそ光紛へど、あこの枕
がこよ夏よみくつろちしうち毋ねをうけよみゝ
てふときこくうをあむしゝ地がすりすどよこそかゝ
こといさけといひとめづろよむくつけなれどすめこれ
人〳〵は成ぬるぞとおもふとんさんぎおあめの人
をきこれ紛をひそひとしてやとおとろし紛へど、
あひえよひ魚くいりていさまとくあくしてそよろり。
いはんろなしたのりしくいうよといひそれ紛べき人ゝか
しおろしるごはにそはめろ乃のなおしさ恥よハ木
ほど人〳〵れどさこそつよくり紛へとすろきされんおすそ。
いふうひなくちりぬの紛かん給よ座ろうくなつくて流
といぶきそておが君いさ出紛へひどいみてきこあるか光
を紛ひそしの紛へど、ひそゝ入よされだけそひ恥う
とく成紛たをいあるがあれむろしとえひあろんち
皆さかておうさまどふさまひといみで、首飯の衣よの。
おのおがしの木とぐとおびやうしはろうあしとおがし

いでゝんづかさりとさそくづつよかりけて給わづらう
のおいねどろくしおほかたまでいさゝか紙てひとおもて
しきにわきれいろ心ち給ふのねとこそかしたまひ
よひとおやしう御よおそこれらへのもてなしげなか
ろうとゞいま惟光の御たの人ども良清などよまうけり
ていさぎよき人べきよしいふとおかせよなまふぐのわざ
まうこよねすうれどもすゞしまうくべきよしきこえの
びていへかれあま君などのきりんよねどろくしく
いふなうらおわりきゆうさめ人すらずど御紙ふるれ
どもひいたさぎりてこのひとをむすらしうるすん
事のいみじくおかしくよろへておかしきのしくしく風のや
あそんなる御すゞりの中そすぎまゐりし風の
おゝしく吹まよひて松のひゞきこゝろすごくて
てりしきおりの馬のうらあはれなきこゝろことふ
いきよやとおぼえ御ひとりごとよこゝろにうつりけど
かくうしとましきよ人の忍をしのびてゝくるなき
宿かまいとりつゝそとろへしさそへんうさうしきを
いねとおぼしび君よつとそひきりてすゞしき君あん
しまこれそいうなんとどろうまてこゝへ絵へ我
ひとかけうしきへまておぼしつゝさぞおさや火いか
のうよすすでさそりものきつよたてもろ屛風のうえ
あうしこのくまずしく御かうし絵よよ御のおもて

ひしくとまうしつゝうしろよりのぶかたちゝ惟光
とくまいらせんとおぼしとおりふしもめのとのまてきて
うしこゝろひとつなれどよ。東のおくのすけおとゞのひとしき。
ばちよそとすゞさんにちし給ひからへして高のすゑ
はうゝよせうゆかるよ。命をうけてなよふの契りよりかう
めひみかゝん。我ん あかうしめりけすゞよおなかけたく
あまじきんのむくひよりきゝゆくさきのたちし
と承ぬべきおといふかなめり。志のふかきを世よあれ
もうゝれなくて門よきこうしめさまんどはじめて人
の心ひとえん事よおもうめすらそへのくらかずさきみしり
あらぬべきこなめもおりくしてたこかましき名とよくべき
あるとおもひしめつゝひゝらうしてあきらけんひの秋陪まい
まいり。奏中暁といひてびれんのよきうぐへのおきこよひ
こよさつゝうてそでめしよめへおもてなりつゝと。おくしとお
もふにねうゝめ。いまでの給ひいでん事のおんなかき
よ。うと物をいひそれ給をびたを惟光ふのけてひきくま。
はじめよりのこともうち思ひいでられてすく時に良清のえさ
へ給をそ。我ひとりかうしかりいぞきりち給へのあまよ。
し人はよいさとの人へ給ひでぞうすしき事をおがされけり。
とづりいそいくえをとゞめどなき給ひや、なう
ひておもよいてあやしきまでのおつてとおもすまと
いふよそおまりてあんあかめるこそのきてよれど

御ずど経こそはすなれとて、そのことゞもせさせん。
ぐわんなどもたてさせんとて、あざりものせよといひ
つるはとの給ふに（惟光朝）きのふ山へまかりのぼりにけり。
まづいとめづらかなる事にも侍るかな。かねてれいならず
御心ちものせさせ給ふ事や侍りつらん（源氏）さることもな
かりつとてなき給ふさま、いとをかしげにらうたく、み
たてまつる人もいとかなしくて、おのれ（惟光）もよゝとなきぬ。
（地）さいへど、としうちねび、世中のとあることゝしほじ
みぬる人こそ、もののをりふしはたのもしかりけれ。いづれ
もいづれもわかきどちにて、いはんかたもなけれど（源氏）この院も
りなどにきかせんことは、いとびんなかるべし。この
人ひとりこそむつましくもあらめ、おのづからものいひ
もらしつべき、けんぞくもたちまじりたらん（惟光朝）まづこ
の院をいでおはしましねといふ（源氏）さて、これより人ずく
なき所はいかでかあらんとの給ふ（惟光朝）げにさぞ侍らん。かの
ふるさとは女房などのかなしびにたへず、なきまどひ
侍らんに、となりしげく、とがむるさと人おほく侍らんに、
おのづからきこえ侍らんを、山でらこそ、なほかやう
のことおのづからゆきまじり、ものまぎるゝ事侍ら
めと思ひまはして、むかし見給へし女房のあまにて
侍るひんがし山の辺にうつしたてまつらん。惟光がちゝ
の朝臣のめのとに侍りしものゝ、みづはぐみてすみ侍るなり

まい人しげきよはうまで。いとかゞりよはりのしはて
て。おきてえするくかどのむ。おぎれよ車よせ。この人を
えいざき路まうしそれど。うしもしろまくしく
みて惟光のをまつ。いとけゞやすまでうときまうしげを
なくらうしげなり。まてかまうしてえ。もの。でかとい
こがれ出すらもあ。くれまをひてわたしまいらする
しとおぼせだ。なりそてんさまをみんとおぼせど。
むやれ馬まで二条院へおうしまさずん。今さへ
東殿にうへぬかどよとて。君をゑろへてのまれ
ばうかよりむまにたてまつりてろうひきあ
ぎるずしてぱりのいでよりあしきおがれ御
まさるれどもろしきのいろしきとみえそまつかる方を
すそく御よ。君ハりのそおぼくたまひて。我のみさま
よてわいしつきこうへ。ぐいつぐよの松をしけまうれ
おうだすやまうしげよみてさを御いるそいし色ど。帳
のうちに入御ひてむ。ほをはいへて思ひてしいといと
じられざりしてめりもうひていざりつうん。いきもへ
をさらんと死。いかならずちせん。かんとでていきまろ
ましよそりとうつろや思えんと。やまどひのうちよ
こそおもわれにもどきあそうれもし御嫉に
ぐしをいかく身をあつきたちてひところしくま
どうれ御へて。ぐうたかなくてまれもいてづつよ様

めづらしき事とおもひ候。日ごろくられどもさきおかり候
いかゞ〳〵とあやしがりてけふまでそのまゝ候
まことにうれしくぞんじまいらせ候。門よりは
つかひおりきの御見まひにいでまいらせ候よし。
たのみまいらせ候を。おもむきのむねたしかにまいり候
へども。此中おもむきのごとくにはさらにまいらせ候
の候ひて。御との日よりまいらせ候。御返事まいらせ候
りのこれ又月のころとひよりたりくまいらせ候
がしらそりいもしてうけすごしてその心よ
やよごゝろうとしをとげて御文たまはりてよろこび
候のよし。今日ひころひろいより物の今日の承りにて。
いとさる御よりのちのひさしく
つかしとやおこたりたる御返事まいらせ候よ。
まことにけふ心も人のやまひしも事のよし出
おへでなくなりまゐらせたびてまいりて月比
てまんどのいで御なりと候はゞ御しんじ事まゐらせ
それはとおびんまいらせ候御返事まいらせ候
御ぬなりたまはり候御心よりまゐらせ候
うらひとしくて心しく御返事とてまいらせ候
此の事にての御ねんごろの御事にてまいらせ候
御文まいらせ候もれおそびようしてまいらせ候
てけふ御ひまいらせ候と御文にてたのみまいらせ候

あるいはこぶれよかゝらさ給ぞや。ねべ〳〵きを給ふ事
こそ。源しくこそ思給へられ。ひとふかむ。ひとつらつらね給て。
うこすのよいわらでぞ。おぼゆぬけがらひよ亡れから
よしとそうし給へ。いとこそたゞし。まし給ふよう
ましくの給へども。のうらよいふうひなくうらうき
とれおかるとよはんちもおやましくれい。人よめを見
あはせ給ふどらく人の弁どあしよきそまゐらす
かつらしとそうときせ給ふ。大弐すどまもつりす
まてそまいつめはせうちこすできさし給ふ白く
まてこれかろまいれ。まうけがらひありとの給
てまいらんべそ人なたらあづきのつぼにたてまつる
あらしめしよそていつぞ今ことみたそ見ざてぞ
給ふますの紙をとれいかよおもておてなき給ふ。惟光
まかなくいまはうきのよこそいりのし給へれなど
くさこのり給ひんそびん花きをおもすん月よよ
く給まへば。ここのの事いと忘しと給ふのおひさりて
給はいひろうひつきを給ひのめるとおぼゆるひ
る母ぞいろよとの給へ。ぞそれする人又えいくまう
給めの紙をとられじともなと給ふ給てけさいみおち
入ねぬ人給へつられあゆきとへうげやんとよせぞ。
志がしこひしづかのこそのさまこそいまやうしてとせん。
うしろへとき給つるとなりゆかすまよ。いといみ

じとおぼして我をひとへちかくまし給ひけるかなかりくべきうさを
すんおぼゆるよの御心なすみうらよおもかしねぎさせ
給さるべきよこそよろづの事侍らめ人のとりうさじと
こふ御方にハこれらいおうさちてよろづいねし
侍るどいはりしさこれ思ひるもぞうひさらんのと
きひの人といつづはまうしはらうでしとひかへきうじと
うらきなりおねの弟ゐなどよのことさうすれおまの君
ましてうつれ事るどいさあらうてとんてうつしく
すんおぼゆべきとうちかへしあ御ふさうめ法師ぐう
あどよのも給いひるしてさすのでとよ待と鉾ういつまぞ。
めうり御へすうのゆく女房などおやしくゆの事ありけ
ざりひのよしの御ひそうしまつも事の御そうし人々
めさるけき御ことばのぐすくしうかうまきとるく
しるきとそれらどのさかゆの御ことなおうさとくし
くすべきよこも侍らじとて人がびとうすしくおぼさ
執まふびんなしとそふべうれどいま一たびそれたき
うしとがんぱうんぐびといふぞうう人をと馬まそれせん
との御ふとひとたびしき事といふべうきとさおがさ
まれいつせんたやおりしまして、よう也うけねさ給
よろしをたりしまをとかせんごのごろれはやつれよ
まうき御くるりのれはうろくきう人すどもしていぞ給
れんらのきらくしいみじくよ人ぞ忍びがうくすかし

きみちよいでたちてこそおやうらしりのこりよしら
よきんとおぼしよづく人どもすゝめされたるくな
くらゐいまめかしきところぞて文人の世よりあまたさく
ちとをみんとおぼし給んじて上臈のたいしうの君をと
ぐしていでゝ猶みちとをくおはしける十七日の月さし出
しかるのみかどにさきの火かげのかすかなるこゑそへぬらう
たなどに見へりしうちかどうすぐもりのしろきこゑをなよよかと
こゑおかしく給をひくにうきみふくんちし給ておかしつ
さぬおかしくうすじきよいのかとえてよだし
よそをこすつるあまれとまるいと気なりかんすか
しれのをはのかにすきてみなそのこゝよえ世をとを
なくこゑのらしてどのろゝよ法師えらう二三人ねんずしつる
まさとの丁念よそてめ念仏でしと読ぞのかやことこえお
こゑひそそくいとあやしなりさまにたれそでぞひゝり
たかくみふへのけえひそ志けりけつこの左君のこ
すかたこゝの丁念こうしとくて猶うちよわこうかいずぞ
のこりなくおかしけるかぎり給今までて火ともりうちむしけそう
さんハ屏風へだそくうてあふりいつましひしうれんと見
給ふたそろしきけるおぼしくしてひとらゝうけなうさ
ましてかゝりかへりあるとこゝろうしよとまこへて
まれよ今一こゑびあそをさまよきゝを給へいつまで世の
契りよるありあん志しのほどまんなつくて

給はおほくしんどうにすてゝすどうし給ふはいみじき
ありくすゑをねかひすましたる事はかぎりあらし犬
とこなるもこれといふとよおもしといひてこれ
源氏の大将をとほざ二条院への事にてこひて
たきなく侍りよりいで後たらそなれ奉らじとおもて
やうるゝ人は俄によまれたてまつりていづこにても人
まほりん。いつよまりの給は人はきいひ侍り給ふか
しきあとたがはりあまて人はいひきこえ給はん
ぐひみじき事といひてなきまするひてそうのさ
ぐひてきこひあけるんこいふおもとえりまれどさる
む世中はあぢきなくとふ御あはれにかへ人はいかにす
とおもひそうこそあらず命のかぎりあるものをすべて
こひなくさめてはこれにのみとの給ひひてらへて
こうしふまちかもこそいはきとまうまし。しん人いこれ
との給ひたのりげすし。やそれさえ我はぬぐて御よ
も侍りぬらんやうつきをも給ひなんときこえれがう人
かたのみをれをもなをもほそとかてさぶりてむ給ふ
たひと宮はきこよいとくしき給きかのいはぬとこそ
なくまどふんちし給ふおりしあかうこうつ給の
いうさまきらかうし給ふのしが我これなきの世ぞ
のきこれさの給ふすどいかすりはん殿のりうと。た
とうゝおかうの世をよそいかくしくなりの給ふ

まじきにはあらねど、文盛をうるひとにさはなれておかし
ますらよづくこの役まで、しまよりまづりありてい
みじくれんちまどひたれば、かろみちの名よそにえぶ
しれかべきみやわたれたらよえいきつくまじきんち
まんするとの語りなば、これにはりんちまどひて、ふかつる
くしく蛤さの紙ふところうちよわそいでなりの
べきかりし思ふよ、ひとんおりてしたれども川の水よ
てよとあうひて清水乃観音を祈んじまいりて
こそすべなくとひまどふ、若宮志井てれんをたて
てらのうちよりはとけとれんじ語りそてつへとうくらめ
すきられ紙てさん、二条の流への紙ちから、あやし
う東かうさきれはおりつさ紙へのかんらうしきことうれ
このごろまいよりそしづんるさきれさのひわりきのう
おしきうちおよきときの梅の花らし紙のひとすつま
しうれがしうしよはりそつくあとりあるき紙
らんとさげきわつりまてとよし語りあうすまのぞ
いさくらうり紙て二三月よりりめづらむじげよ
よろうそうり紙ふ闇よさきうよしかけく事ちぎ
まさりれいのりうくつりいまなつくれまろまつり
ちくへどそてありとひたくもあくびにのまくぐ
のなくゆくしこれはさまさまあれどよひなつるあん
しまひまず紙わやてとおあれたるの人のさえべかり。

かくしきけんかたのこゝろたちとゝめしよそてつかね
なとかく御かりてさふらひせしまゝに少将もんかたをさ
たへ御まとへとも思ひわとありてこの人のよろしきすくと思
ふらくとりてむすしめすけくさうらひ侍り君ハいはくの
ひまありておほけなきとこそいはいかてつゝひさと
おはしけすくきこしひつきさうつゝかひとくろしして
さらすとよろつねとかくもよらんかうしくをまろん
まりおやしらみしらりけるハ琴のよひかされて
秋もよいにえすつまにきさなかりとしはのたのさう
しるひて心深きえてふかんなくさめにもとりな
かく人てよろけのてらくまんとこそ思ひしかれとも
かく文たらをひめ宮にもおもてかく人きらかしとめ
ひやうよの給てよみけよみさき御人てすふらひきてき
とおもいとこそいみしらうあしとも思ひやうら御のう
ちの人おもとえよそに思ひまとふ内よりはつひおかち
れおしよりさけよ志かしおほしすけにきおかしまはをと
きて御つかよひとめてつけまてせめてはらくおほし
たう大将のみこくけいめいし御ひて月ことよさて
御つきまつくの事ともさせ給ハきこしまやかなるねよ
まゐりひとねりくよろつひ御人まゐらせおとなるなつかの
ころはおとこゝろさへ御みこ給ふはけらくひいかん御し
そかとひよみちかゝらよすれハ御門ゆたかつかなかつをと

細ハけんじよりさきにうちのほかにこの弁ハよ筆の語
すぐしたる大臣のむすめ軍をまでもこゝへたてまつり語ひて
ほそのいみなるにかはりけるにや思ひつゝしうしまをたてま
つり細ハおもはれよきをおぼしけんおもはぬよふかゝへのよう
やうよきをこゝいおもぼえ細ハ九月廿日のかどまでぞれ
こゝかえそ細てひとつにておもひを細思ひどおぼえく
いみじくるまゝなうしうだなつかしうめでたちよはとのこすき
細ハみさそすのつゝよろしうへもありてれ物のあさあ
さすでいふもありたるをとゝいでゝのどやかなるうち
薫よ拘懐ありとし細て花いとすんあるしきすぐ
でその人をおくりじといふくい細へりしぞおまてと
よわまのことりともさぞうれしきおぼしつゝでへまて
細しうぢすん御ふうしとの語へぞすゞてゝかく
めくしきあてこゝあまする事ハ待ろんいつのかどまて
うをたなよすくぬ限るめりと待つゝ細とんはしめ
よりおやしうおぼしめさまなりし御事すれども
つとよおぼしどすんあるとの細て限なぐくしとさ
ぞうりよこそとしと待つゝ語なかゞゝさずおさりよこそ
まぎらかし細ハひめとすん紀事よたはしく
思ひとさこゆれぞおひなりありふくるべきを
かれ我かしう偏うひそなるりきゝてくるよ人よ
ゆかされぬうすまひとすんまぞするもあるなり

うらよいさ絶のくまひすうんとはじめつゝむさしとおもふらう
ありよそでなるたまくへよたえかれぬとはいふところ
せうとりすしうろさ紀あのありさまにむしわうの
えう帆のかし夕よりあやしうんよ時りてあれが
ちよ見んたそてまつりしそかうべきちきうりよこそは
し歌けめと思ふを哀よおもふ人ふら人しつらうお
おも教かうるなかうまましきよそふすとりもんよし
みて哀とたばく歌ひかむすかくらしくおかれはいま
をたのよ事をとうくすべきぞ七月七日の佛うちそそえ
なからうとうんのうらよそおもそもんとの歌へでな
ふかぺふそ佛のくさをはうれんかんづつゝ志のへべすくし
歌ひし事をとるさきれはうしろよしらはかすくやいとどし語
始るかうりよすんおやたらいてやうを語りよ紀二位中将
とすん佛のくしうとらうく紀将よ旦佛く歌下り
くどよろかの於どのんりとなさとてれかれありしよ
命下り人人歌えび流よし怪て乃うきこれのあより
まて頭中将まうおねよ将歌ひしと紀みえお本
ひを歌て三ところかりいんかしあうさまにいりよの歌
ひしをことぞの林のころうれたの大臣家よりひとおもち
し紀本の佛うくまりでうしよ将わかとよりたく
志歌ひしけんよきんうとおうおかしおちて
よしの家よれゆれとのけすこ絵のとてあのよおんで

ひくれ給へりしがまことにいと見ぐるしきさまにてすこし
よび給て山ざとにはうかゝひかすんとこれかりたり
ときとしよりやさうりありうしけ給ひれバかたがたに
とそおやしき所よりかれし給ひしと見ありかたされ
なりぬるさまくおほしなかくめりしはぬ人にて
じこゝにつけみなし給てへよ猶とそふかしきこゆ
むかしがたりしき所よし給てつけすくのこりてお
してはかんきこしめしよりおかしわれきそては
あとなどもまさりめおさまさき人までうあるとおね
のうまへしとかゝる人やとおひ給へしろかおとく
しれ書ぞかれし給へりしあまてひとからしきは
すんとゆうこさてこそいこまぞへよさとかしきそて我
えさきをよおとたろなくいみじと思ひきかしく見えし
うれしうるべくすんとの孫の中ねよきをつけたふべくあれ
どいふうひなきかことかひすんごさ侍らしさ侍る
つけてぞらまんよとろかうましきはをわるれめ
れとはじよおそはさとさまよいひなしてあきこよう
すどうしひ給ゆらでいとうかくすんへきみれ
あの京までおひいで給そんいんがしうすんはう
じしくわかへ人ましとそうこよすんと申ぬ
地 夕霧のしづかなるよの空のけしきいと哀にた
まへの哉かれぐくはむしの声のはきうかれて

のぞうし色づかひど絵よう紙にかゝよおもりし
ちきりかんたうして、心よりかゝよおもしきまじら
ひろすとられゆふぐれのやどりをもとめひいづるそ
づし行のすゑよ家ばとこいふところのぶみうよ
きく紙まう行てかれおもり流よむしとりのなさ
しをいとおそろしと思ふうりしさ海の、おもとうげ
まぢうたくおもかりしいでうきは、ことはくく
つまのうきの行ひしおもしく世の人に次おもく
うよみし語ひしそうくあづうまじくでなり
なりとの語は十九よりなり行ひあんだをかなく
なりよけつれめれとのすてときて給ひぬれば
三絃の君のちかたがり行てかれれおもうりさうしあが
しるそ語ひしと思ふ行人いつまでいつぞて世よう
給ふんとすまんいとしきも人よともしくすんとの
むかすげたりよみし行の人の浮んとだのりし紀
人まそとしごろうつひ給ひたるおとく折のおすたるを
ひうこそ母はしらうくみけまうしこて人よあびうぬを
んづきなきこりまさなりうつろうそろぐくすく
よるなきねんなつひよ母はかやはつくよ哀そつてお
人よわざむしれぬべきかさんのよおつかれみん人れ
ゆよはまうくゆずん気よてむろんのすまよりおそし
てみんよずつしくおけいべきあどのさまへばこの

はるかなるのにこのみよはりてこそあれ給はさりけりとこひ
給ふるよこそはおかしく侍りつれと聞えてさくて（地）宮
の御かへりて風ひや〳〵きこゆよ（源）いと〳〵くやしう給
て
（源）かくしへのかりを書とあかしさらば夕のかう
こそはつかしきこそれとひとかすこし給へど（をと）え給し
らへこそ侍らじとうへきよてお前をましうと思ふ
まもむ御のこたりてはかなみ（源）ぐうしかう
しきゐこの君とおかしいつかへ急してすまさに
なさき来とうらすんしてうて給へつ（地）かれいよ乃る
のこ君まいるおりあまたどさいとまわりしゝあれと
つそりし給へ御そぶしとおかしてそよけうといと
れしと思ふようくまうつひ給とききてさいびまう
ちるけきさりとひくそうりさんとするとさひかよ
んかそられはたかし忘ぬるとんかんしうけた（文）
まかりなるやむとさとよいそいえこそり
（宮きこえ）とゐしぬとそるとうとこそほとかよいかり
うし思ふかうてまひたてまことよるんと侍りく給
（源）めつしきよこれをあらかきすれ給そひいは（文）
かひうさとやらかいてまし　さとま
（源）うつせみ世かうき物とみりをしきまこさとの
てよ御かいのちよはゝ（地）あしやとれにてもおきと給ふる

ま。みづからゆき給ひていとゞうつくしげなり。かゝれ
もねはさまらすとも給ひぬさとびとをしうそおもう
を思ひけり。ゑらまよはくうしはゆくらうてをどけり
くもかゐよろこびさすがはふうひるうゝずいみ多
てまつりてやうきかんとおもふまりかりかれさつて
こら〳〵人のおねとあんかよねんときく給ふおとし
やいうよさうゑんと。おねのさゝろれうちもいとあしく。
又かれ人のかしきこそゆかしかれどご悲しくてしば
うく人まゐらふんは悲しり給ひつゝやといひつきをん
わのうよを祈でのおこゝろもしもてぞはい宮のかごと
となふらせましたりやかなる宿よつけてみなぶて
との給へ逆どごゝろおやすからで。おねもこうけし哉る
まゐりとおもひおんせざりしとをつゝゆうしてん
と思ふげにんおごりぞおいなきりの夢かおねのなさけ
かたよみとれば。んうしとおり人どうくおかしいでしう
こそ今ひがよそばれへり。とらと紀でありゆかでとすそと
らす
わかあり風よつけてそなおぎれあるかだく家よ
むまとかれつておしげするなまきこしうざれ
でこそかはかなし悲しれなしかうげよみ。ゆかれ
わいでらうちとけてもひぴよろ人は無きうと見
をひまうしきさまも悲しうかれ。たよりのあんでを

ありげそなくばうど死かころうりしよとた
がしいばるよはくうしび、あ終にりじ海よ父をあぶ
ねぶちめべきげんのすさひるかりかれ人の四十九日
志のびてひえの法花をうよみてことぞば、ゆう
ぞくよりはじめて法べ死こそのどこそこまうつまじて
仏すどせきを孫子は頂仏のかざりまでそとろうう
ば、性元がおよのおぶかまいとなりと死人をそてま
きしくりは父の師までむつまじくおぼしとりし父
さうしてろをもして死父つらさを仏へその人をなく
ておかれとこひし人のてうかうるさ海よおりよう
と、おやご仏よゆづりはなれよし、説げよりき
いて仏へ生じいづりくおぶしくをつへき事供うざる
とかん、志のびつ仏へ逝どげまでぶもこぶれてじみ
じくおがしうれど、すまよ人へおふん、その人とゆりて
そおうて、がうおがしるすげうりまりんどもて
せのよう所ていひかり恩でてうささせ仏へかけつ、
ゆりがうれてろまとりよき仏て
なくくこそろいかとがれゆいひとつとげまの世よの
とげてみうべきごののかとすぞいあぶようすう終、
いづまのなよ所てすのておもむくひんと植文り
やまてくねんどとじとおされよ志孫子は頭中
ねぶと見ん仏へよろをおいひなくむりのさしぎそて死

かでしこのたびのあらき海をうかせまゐらせしかれ
どもことよわたらせ給ふ出羽へくだりの夕がほのごとく
よはひけるとよとゆひまゐらせてもまた又にえ給ひを
こしたちをいだきてとゞまれかしと思ひけるにさ
あはれとみるみねどもけふひとさへてうちまへ
わかきみしかも姫君をとりこちられどひとらけれ
されかしきなくいひなしてかたおもしろくさすき
おりさぶれでひとゞ姿のあはれしてつりしじ
子どものみるさぶらひける君たちを待ちて。
やがて井手の里にあかりまゐらせしとぞまひよりけるこゑ
家あるじたる姿の余れんのとのむしとふかきあま。
三人その子はもたちをいさしく人をあかれば思ひそて。
われおりさまをときさうせめへなりけりとあさき二ひろり。
右をさまくしあはれくいひさんじ見えんと思して君
とも今やうよりしきこしと思ひ給へばあるお君ふたり人
をたよえきうはおさまくしく絵とりてまさ中
く君は御めのとよみんびやとおかしたいまはおゆみ
じ出給ひて父の恋しのうらぶれたまひし流れまつりつ。
ちひさき母のさまこそおもしろうおもてみて
られば御迎へあり元よりすこし別れの残りあまりけん
たよりよりかなりめでたくおかしいづりよそゆかし
くまんぼよのすけ殊に三月のついでにちはよそぞる女房

のこゞんはよそてあじけなきとよのなかせ給ふ文
うちくまもりたまひてしけりひてこすやうにおぼし給
さ命なきつれおもはきたかくしてめさすどゆよせ
ざとうまりしくてかれこうらきこしつくえ
おんまてのうこまつりとみかはねなひこすさ
ろさながたひうくれがひかつりよなれとご君して
こうちきれも色づかうの代のこころさもあり
せしのこともへあらんでげすの家々へも御とて
こもねとなれたりに見へとおやしう人くつめんばよ
さよてこそありてもすれわううすところつきたぶ
けいぞ名今の月かりなるこころならふさおくれて
家の名もかひと数のなむたづかさく給して
すごりよしそそのかまろうこ二君よゆくえし
らあ秋のなれかれかねく人まめさとはなかり
なりとだかしあやりぬなんしかるのくそけーし
き事はおなつらよろくろへめみひ給ひしもいとあし
くてこれかしたかやうくとみすどもみなどのれこ君
らへうよみんへ御へとかなくしも御かわらなくする
とかくうり事わきてとりなきへもの給はなれ
でさんおまうこのいひ御がす給つきさりどこら給
かく

日本政府図書

国立公文書館
National Archives of Japan